OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「鹿ケ谷事件」再考
Author(s)	川合, 康
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 2021, 55, p. 1-26
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91472
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「鹿ケ谷事件」再考

川合　康

キーワード：鹿ケ谷事件／平家物語／延暦寺／平清盛／西光

はじめに

本稿は、『平家物語』諸本や『愚管抄』が記している所謂「鹿ケ谷事件」について再検討し、その事件の本質を明らかにすることによって、『平家物語』成立事情について一つの論点を提示することを目的とする。この「鹿ケ谷事件」とは、①京都東山鹿ケ谷に所在する法勝寺執行俊寛の山荘（『愚管抄』では静賢法印の山荘）に、後白河院や権大納言藤原成親をはじめとする院近臣たちが集まり、平氏一門を打倒する謀議を行ったが、②その謀議に参加していた摂津多田源氏の多田行綱が清盛に密告したため、③謀議を知った清盛が、藤原成親や西光ら院近臣を捕らえ、西光を殺害するとともに成親を備前国に配流し、藤原成経・平康頼・俊寛を薩南諸島の鬼界が島（硫黄島）に流したという、『平家物語』によって広く知られている政変である。

筆者は二〇一二年に「「鹿ケ谷事件」考」を発表し[1]、このような通説的理解に対して、次のような疑問点を提示し

た。それは、安元三年（一一七七）五月二十九日夜半から六月三日にかけての、西光の捕縛・殺害、藤原成親の捕縛・配流、俊寛ら院近臣の解官などは、同時代の貴族の日記に詳しく記されているものの、①の平氏一門の打倒の謀議については、西光捕縛後において、尋問を受けた西光が「可レ危二入道相国（平清盛）一之由」を白状したという噂レヴェルの情報が、『玉葉』と『顕広王記』の二か所に記されるだけであり、②の多田行綱の密告については一次史料で全く確認できず、③の謀議を理由に政変が引き起こされた点についても、二か所の噂の記事に限られ、以後は史料上に一切あらわれないことである。そして、①②③の「鹿ケ谷事件」の顛末を詳しく叙述するのは『愚管抄』と『平家物語』だけであり、それを要約した記事を掲載するのも、『百練抄』『保暦間記』などの編纂史書に限られることを指摘した。

後述するように、筆者は、安元三年の政変は平氏打倒の謀議に対する報復ではなく、後白河院と院近臣が計画していた延暦寺に対する武力攻撃を、平清盛が阻止しようとした武力介入ととらえており、平氏打倒の謀議を理由に、清盛が院近臣を捕縛・処刑したとする「鹿ケ谷事件」譚は、当時流れていた噂をもとに、のちに『愚管抄』や『平家物語』が創作した虚構として理解している。

そこで拙稿では、③の謀議を理由に清盛が政変を引き起こしたとする研究史上の学説を、「鹿ケ谷事件」という枠組みが歴史的に存在したことを認める「鹿ケ谷事件」肯定論と整理し、批判した。この場合、謀議は実際には存在せず、たとえ清盛による「でっちあげ」であったとしても、それを口実に政変を起こしたと理解するのであれば、「鹿ケ谷事件」肯定論となる。私見は、拙稿で「①の平氏打倒（清盛殺害）の謀議は、捕縛された西光の白状で明るみになったことであり、どれほど具体性をもっていたかは不明であるが、その存在自体は否定できない。しかし、③の清盛による西光・藤原成親の捕縛は、その謀議に基づくものではなく、延暦寺への武力攻撃を阻止するための軍事介入と理解すべきであり、②の多田行綱の密告も史実ではないと考える」（二四三・二四四頁）と述べ、謀議があろうが

なかろうが、政変にいたる政治過程とは無関係と理解し、③を明確に否定する以上、「鹿ケ谷事件」否定論である。

そもそも安元三年の政変は、拙稿で述べたように、西光の子息加賀守藤原師高・目代師経の兄弟が、加賀国内で白山中宮・延暦寺の勢力と対立し、白山神領の在家を焼き払ったため、安元三年四月十三日、延暦寺大衆が加賀守藤原師高の配流を求めて、神輿を奉じて閑院内裏へ強訴に及んだことが、事の始まりであった。後白河院は、事態を収拾するため、四月二十日に加賀守師高の尾張国配流と神輿を射た武士たちの禁獄を行ったが、その後は延暦寺への反撃に転じ、五月四日に天台座主明雲を拘束し、翌五日には天台座主職を解任、同十一日には覚快法親王（鳥羽院第七皇子、後白河院異母弟）を後任の天台座主職に補任した。さらに院と近臣たちは、公卿議定の結果を無視して、明雲を還俗させて配流することを決定し、同二十三日に明雲の伊豆配流を強行したが、二千人の延暦寺大衆が近江国国分寺中路で待ち構え、明雲を奪還して比叡山上に連れ去った。この報に激怒した後白河院は、延暦寺を武力攻撃することを決意し、左大将平重盛・右大将平宗盛に出陣を命じたが、摂津国福原に隠棲している清盛が延暦寺と協調関係にあったため、両人は清盛の意向にしたがうと回答した。そこで院は使者を福原に派遣し、二十七日夜に清盛は入洛、翌二十八日、院御所において後白河院は清盛と対面して、延暦寺への武力攻撃を合意させたが、清盛は「内心不レ悦」という様子であったという。そして二十九日夜半、清盛は、まず紛争の当事者であった西光を捕縛するとともに、翌六月一日には長年にわたり延暦寺と対立関係にあった藤原成親も捕らえるにいたるのである。

安元三年の政変はこのような政治過程のなかで出来したものであり、あえて「鹿ケ谷の謀議」を介在させる必要はなく、延暦寺への武力攻撃を阻止する行動として理解することが可能である。いわゆる「鹿ケ谷事件」譚は、延暦寺と院勢力の対立から生じた政変を、清盛と院勢力の対立として再構成した虚構であったと考えられよう。筆者は、二〇〇四年の拙稿「治承・寿永の内乱と伊勢・伊賀平氏」以来、一般向けの通史や概説書、講演録などで同趣旨を繰り

返し述べてきたが、[2] 書き方が明快でなかったためか、誤解に基づいた批判や反応にたびたび接した。

例えば、松下健二氏は、「近年では『平家物語』に由来する従来の鹿ケ谷事件像は大幅な見なおしが迫られている」として、拙稿「「鹿ケ谷事件」考」もとりあげているが、「平氏討伐の陰謀が緊迫した状況を打開するための口実に利用されていたという点では意見の一致をみているようだ」と述べている。[3] しかし、少なくとも拙稿では、「平氏討伐の陰謀」が状況を打開する「口実」に利用されたとは考えておらず、その必要もなかったと理解している。また、遺憾なことに、拙稿を「鹿ケ谷の陰謀」実在論として紹介する論考までが公表された。[4] かかる誤読を独り歩きさせないためにも、拙稿に寄せられた批判に答え、あらためて自らの理解を明確化し、政変の歴史的性格を論じたい。

第一章　「鹿ケ谷の陰謀」をめぐって

すでに一部を紹介したが、平氏打倒（清盛殺害）の謀議について記す同時代史料は、次の二点である。

〔史料1〕『玉葉』安元三年六月二日条

二日、庚午、雨下、去夜半刻二西光頸一了、又成親(藤原)卿流二遣備前国一、相二副武士両三人一云々、或云、西光被二尋問一之間、可レ危二入道相国(平清盛)一之由、法皇及近臣等令二謀議一之由承伏、又注下申預二其議定一之人々交名上云々、随二彼状一可二捕搦一之輩太多云々、或云、成親於レ路可レ失之由云々、又云、左大将重盛平に申請云々、此間説縦横也、難レ取二実説一歟、

〔史料2〕『顕広王記』安元三年六月五日条(5)

法勝寺執行俊寛解官解官、尋二事発一者、寄二事於大衆一、謀欲レ誅二禅定相国(平清盛)一云々、

〔史料1〕は、捕縛された西光が殺害され、藤原成親が備前国に流された六月二日になって、右大臣九条兼実の耳に入った情報である。これによれば、尋問を受けた西光が、清盛の命を狙う謀議を後白河院や院近臣らが行っていたことを白状し、そこに参加していた人々の交名が作成され、それに基づいて多くの近臣が捕らえられるだろう、という憶測が広まっていたことが知られる。また、備前国に流された藤原成親が道中において殺されるという情報や、成親の妹を妻にしていた平重盛が成親の命乞いをしたという噂も伝えている。兼実自身が「是問説縦横也、難レ取二実説一歟」と結んでいるように、真偽不明の様々な情報が貴族社会のなかで飛び交っていたのであり、ただちに記事の内容を史実と理解することはできない。

〔史料2〕は、さらに数日が経った『顕広王記』六月五日条である。西光・藤原成親に続いて、六月三日夜に「法皇近習之輩」である法勝寺執行俊寛・卜部基仲・山城守中原基兼・検非違使左衛門少尉惟宗信房・同平佐行・同平康頼の六人の院近習が捕らえられ(6)、翌四日には基兼・信房・佐行・康頼の見任が解却された(7)。〔史料2〕は、五日に法勝寺執行俊寛が解官されたことを伝えるものであるが、ここで顕広王は、政変の原因として、延暦寺への武力攻撃の混乱に乗じて清盛を討つ謀略がめぐらされていたという説を書き留めており、〔史料1〕とほぼ同内容の情報が流れていたことが確認される。

このような謀議に関する情報は、西光・藤原成親の捕縛・処刑後に流れており、何人もの有力な院近臣が次々と清盛に捕縛されるなかで、かかるデマが流れることはむしろ当然であろう。それよりもここで注意すべきことは、西光

と藤原成親を除いては、清盛は後白河院の許可を得たうえで院近臣の処罰を進めており、[8]木工頭平業房については連行後に院の再三にわたる懇願によって放免するなど、[9]院を必要以上に刺激しないよう冷静に行動している点である。[10]こうした清盛の態度を見ると、清盛殺害の謀議に参加した罪で院近臣の捕縛を進めたとは思えないのである。そこで、あらためて西光・成親が捕縛された直後の『玉葉』の記事に注目したい。

〔史料3〕『玉葉』安元三年六月一日条

一日、己巳、天晴、辰刻人伝云、今暁入道相国坐二八条亭一、召二取師光法師一（法名西光、法皇第一近臣也、加賀守師高父）、禁二固之一、被レ問二年来之間所レ積之凶悪事一、幷今度配二流明雲一、及讒二邪万人於法皇一、如レ此之間、非常不敵事等云々、又今旦招二寄成親卿一、同以禁錮、殆及二面縛一云々、武士充二満洛中一、

この記事によれば、清盛による西光の捕縛・禁固の理由は、長年にわたって西光が積み重ねてきた「凶悪の事」を尋問するとともに、今回の事件で明雲配流を進言したことをはじめ、万人を後白河院に讒邪した罪科によるものであった。長年にわたって西光が積み重ねてきた「凶悪の事」とは、第四章で後述するように、仁安二年（一一六七）二月に天台座主快修が山上から追放された事件や、嘉応元年（一一六九）十二月に藤原成親の配流を求めて延暦寺大衆が大内裏に強訴した事件を、明雲の仕業として院に讒言したことを指していると思われる。九条兼実の耳に入った西光捕縛の第一報は、まさに延暦寺と院近臣の激しい抗争に清盛が介入したことを示す内容だったのである。

治承・寿永内乱後に執筆された記録性の強い年代記『年号次第』（お茶の水図書館成簣堂文庫蔵）には、「延暦寺一宗永可二滅亡一之由風聞、其僉議人々師高親父師光法師・法勝寺執行権少僧都俊寛・権大納言成親等也」とあり、[11]延

暦寺との紛争の当事者であった西光・成親はもちろん、俊寛らも延暦寺への武力攻撃を進めようとした張本の一人であったことを伝えている。清盛の行動は、西光・成親の処刑から俊寛らの捕縛・配流にいたるまで、一貫して延暦寺問題への対処であったといえよう。噂として一時流れた清盛殺害の謀議は、あくまで噂に過ぎず、この政変の本質とは無関係だったのである。

近年、呉座勇一氏はその著『陰謀の日本中世史』の第二章「陰謀を軸に『平家物語』を読みなおす」において、「鹿ケ谷事件」を検討している。[12] 呉座氏の「鹿ケ谷の陰謀」説批判が、基本的に拙稿に基づいていることは、呉座氏自身も認めているところであるが、拙稿に対して「川合氏は謀議の存在じたいは事実としており、この点は疑問である」（五七頁）と批判している。しかし、秘密裡に行われた謀議の有無を論じることに意味があるとは思えなかったため、前述のように、「どれほど具体性をもっていたかは不明であるが、その存在自体は否定できない」と述べただけであり、謀議の存在を事実として論じたわけではない。むしろ「秘密裡に行われた謀議の情報を切り札にして、有力な院近臣であった西光や藤原成親を捕縛できるほど、貴族社会は無秩序な平氏の恐怖政治下に置かれていたのであろうか」（二四二・二四三頁）と疑問を呈し、平氏打倒の謀議ではなく、延暦寺への武力攻撃を阻止する軍事行動だったからこそ、清盛は思い切った行動がとれたのであり、一定の正当性をもって貴族社会にも受け入れられた、と主張したのである。つまり、謀議があろうがなかろうが、この政変には無関係であることを論じたのである。

しかし、呉座氏は、「西光を斬首し藤原成親を配流先で殺害するという清盛の苛酷な処罰には私的制裁の色が濃い。延暦寺問題で逮捕された西光が清盛誅殺の謀議を自白したことが、清盛による私刑の根拠になっていたと思われる」「平氏一門に批判的な西光・成親を延暦寺問題で別件逮捕しておいて、陰謀の罪を着せ、死刑に処すことこそが清盛の狙いだったのではないだろうか」（五七・五八頁）と述べている。筆者には、陰謀の罪を着せようとしたという「陰

謀論」に、呉座氏自身が陥っているように思えるが、いかがであろうか。また、前述したように、呉座氏は『軍記物語講座』の別の論文では、「「鹿ケ谷の陰謀」実在論が再び力を増している」として拙稿を紹介している。[13] どこをどのように読めばそのような理解にいたるのか不明であるが、私は呉座氏の研究者としての姿勢に大いに疑問を感じる。

第二章　軍事介入の正当性をめぐって

「鹿ケ谷事件」肯定論・否定論という研究史整理については、髙橋昌明氏から批判を受けた。拙稿では髙橋氏の説を「鹿ケ谷事件」肯定論に分類したが、髙橋氏は『平家と六波羅幕府』の補記で次のように述べている。[14]

> しかしながら筆者も「鹿ケ谷事件」という事件の枠組みそのものを歴史的に認める立場だ、と「鹿ケ谷事件」肯定論として一括して批判されるのは乱暴な議論である。氏が「鹿ケ谷事件」というカッコ付きで語る従来の歴史理解は、「延暦寺大衆と後白河院・院近臣との政治的対立を隠蔽して、清盛の西光・藤原成親に対する異例の処罰だけを、清盛のおごりに満ちた権力を象徴する」（二四四頁）ものとして語る立場であろう。（二一五頁）

ここでまず確認しておきたい点は、髙橋氏が右で引用されている拙稿の文章は、拙稿を見れば明らかなように、慈円が『愚管抄』において安元三年の政変をどのように描き直したのかについて述べた文章であり、研究史における「鹿ケ谷事件」肯定論の内容を示した箇所ではないことである。「鹿ケ谷事件」肯定論とは、すでに何度も繰り返しているように、本稿の「はじめに」で述べた①～③の要素のうち、③の謀議を理由に清盛が政変を引き起こしたとする

研究史上の学説を分類したものであり、謀議を清盛による「でっちあげ」と理解する下向井龍彦氏や上杉和彦氏の説においても、[15] それを理由に政変を起こしたと理解する以上、「鹿ケ谷事件」という事件が歴史的に存在したことを認める立場となり、「鹿ケ谷事件」肯定論に位置づけたのである。では、高橋氏の③の理解はどのようなものであろうか。

> 筆者は一貫して後白河による延暦寺への強硬姿勢を軸に歴史的な推移を跡づけ、その中で西光・成親の逮捕を論じたのである。この経緯については川合氏を含め他のどの論者よりも詳細に史実を復元したつもりであるし、窮地に追い込まれた清盛の一発逆転の手段として、西光・成親の逮捕を理解する立場に強く共鳴している。そして西光の自白によって発覚したものとはいえ、平家打倒の謀議が存在したことは当然前提である。それなしにでっちあげだけで、仮にも権大納言の地位にある院の寵臣を、解官も待たず配流し、あげくには惨殺するという暴走が可能などとは信じられない。したがって氏と違うのは、行綱の密告がなかったと明確に断言していないという点だけである。（二一五頁）
>
> （原論文にある段落は川合が省略した。以下、同じ）

ここで高橋氏が「平家打倒の謀議が存在したことは当然前提である」と述べていることによって、拙稿との違いは明白であろう。高橋氏はやはり謀議を前提として、政変の強行が可能になったと理解しているのである。氏は「でっちあげ」でこのような政変が起こるはずがないと主張して、謀議の実在を強調しているが、拙稿では、平氏打倒の謀議があろうがなかろうが、延暦寺と厳しく対立する院近臣の西光・成親以下を捕縛・処刑することによって、延暦寺への武力攻撃を阻止したと考えているのである。

なお、一言付け加えるとするならば、高橋氏は右の引用のなかで、「仮にも権大納言の地位にある院の寵臣を、解

官も待たず配流し、あげくには惨殺するという暴走が可能などとは信じられない」と述べているが、藤原成親が惨殺されたということ自体、必ずしも自明の事実ではないことに注意しておきたい。前章で掲げた〔史料1〕の『玉葉』安元三年六月二日条には、「或云、成親於レ路可レ失之由云々」という噂が記されていたが、護送の武士「両三人」に付き添われて備前国に配流され、六月十一日には九条兼実のもとに「成親在二備前国一(平重盛)于今存命、内府密々送二衣裳之類一云々」と、平重盛から衣類の支援などを受けて、配流先の備前国で存命しているとの情報が入っている。成親の配流先については、延慶本『平家物語』は「殿ハ備前児嶋トカヤヘ流サレ給タリケルガ、過ヌル比ヨリ、有木別所ト云所ニオワシマス」（第一末「成親卿出家事 付彼北方備前へ使ヲ被遣事」）と記しており、[16]最初は備前児島に流され、のち備前・備中国境の吉備の中山の有木別所に移されたとしている。『平家物語』諸本において、成親の配所が児島と有木別所の両伝の間で揺れ動いていることが指摘されているが、[17]児島は海上交通の要衝で、平氏権力の拠点となった地域であり、有木別所は山麓に吉備津彦神社・吉備津神社が鎮座する吉備の中山に所在しており、古代以来の吉備の宗教的中心地である。清盛はわざわざこのような土地に成親を流して、惨殺しようとしたのだろうか。

『顕広王記』同年七月九日条は、「入道大納言成親卿薨二于備前国一、年卅云々、依二艱難之責一、飲水増気云々、実不レ飲レ水歟、依二条々迫責一、其命不レ堪、薨去了」と記しており、成親が迫害によって死亡したという情報とともに、飲水の病が重症化して病死したという説も伝えているし、『愚管抄』には「七日バカリ物ヲ食セデ後、サウナクヨキ酒ヲ飲セナドシテヤガテ死亡シテケリ」（巻第五「高倉」）と、七日間絶食させたのちに酒を飲ませて死亡させたと伝えている。また、延慶本『平家物語』でも、菱を植えた穴に成親を落として惨殺したとする一方で、京では「歎ノ日数積テ、ヤセ衰テ思死ニ死給タリトモ聞ユ」（第一末「成親卿ノ北方君達等出家事」）など、成親の死因に関して様々な噂がささやかれていたことを記している。実際に成親がどのように死亡したのかは不明であるが、『平家物語』

が描くような残酷な殺され方だけが史料にのこされているわけではないのである。

筆者は、備前国児島あるいは有木別所が、譜代の平氏家人である難波氏・妹尾氏の本拠に近く、監視の目が行き届く地域であることを考慮に入れると、成親をしばらくの間その地に移し、治承三年（一一七九）十一月のクーデタで同じく備前国に流された前関白藤原基房と同様に、やがて赦免して京に呼び戻す予定であった可能性もあるように思われる。鬼界が島に流された俊寛が、実際には赦免される前にその地で死去したと推定されているように[18]、成親も配所において何らかの事情で急死したのではないだろうか。いずれにしても、成親の惨殺を前提に平氏打倒の謀議が存在したと判断する議論には、賛同することはできない。

高橋氏は先に引用した文章のなかで、「したがって氏と違うのは、行綱の密告がなかったと明確に断言していないという点だけである」と述べているが、すでに論じてきたように、高橋氏と拙稿は根本的に理解が異なっている。そもそも、秘密裡に行われた平氏打倒の謀議の情報が、なぜ清盛が院近臣を捕縛・処刑する正当な理由になるのであろうか。この政変は、延暦寺への武力攻撃阻止という、平氏一門の個別的利害を超えた目的・正当性があったからこそ、清盛の軍事介入が可能となったのであり、後白河院政の延暦寺に対する強硬な政策に反対する貴族社会にも受け入れられたのである。高橋氏が可能性として指摘したように、謀議が「酒席にありがちな大言壮語の域をあまり出ず、準備粗漏なものであった」（二〇八頁）とするならば、なおさらのこと、平氏権力によるよほどの恐怖政治を前提にしない限り、高橋氏の理解は成立しないと考える。後白河院政が機能していた安元三年段階において、普段福原に隠棲していた平清盛がそのような絶大な権力をもっていたとは、私には思えないのである。

第三章　『平家物語』と『百練抄』の関連性をめぐって

平清盛によって西光が殺害され、藤原成親が捕縛された安元三年六月一日の『百練抄』は、次のように記している。

〔史料４〕

六月一日、入道大相国召二取権大納言成親、右近少将成経、左衛門尉師光法師一（西光法名）禁二固西八条亭一、各上皇恩寵之輩也、成親卿已下有二密謀一之由、源行綱告二言入道相国（平清盛）一云々、入レ夜師光法師被二梟首一、今日、天台大衆下洛、而聞二此由一含レ悦帰山、明雲罪科事、師光法師讒奏之故也、於二成親卿一者遣二備前国一、

右の記事の前半は、『平家物語』と同様の「鹿ケ谷事件」を伝えているが、拙稿では、『百練抄』は「『平家物語』のテキストと密接な関係をもつと理解されている文献」の一つであり、ここに見えるからといって、多田行綱の密告に基づく「鹿ケ谷事件」が実際にあったと理解することはできないと考えたが、髙橋昌明氏から次の批判を受けた。

しかし、たとえば『百練抄』六月一日条には「成親卿已下密謀あるの由、源行家入道相国に告げ言ふと云々」とある。早川氏は、その自著で「『百練抄』の記事には、他の史料類には見られない記事で、平家物語にのみ一致する記事が多いことも確かである。今後の具体的検討を待たねばならないが、『百練抄』の記事の中には、案外、史料源を平家物語に特定できるものがいくつかあるのではないか」と述べておられるが（同氏著書二一頁）、その

仮説は証明されているのであろうか。これが川合氏になると『百練抄』は「『平家物語』のテキストと密接な関係を持つと理解されている文献」と、すでに既定の事実化しているように思われる（前掲論文二三九頁）。『百練抄』は年代記であるが、原拠史料には貴族の日記類が想定され、当該期にかんしては『吉記』（平田俊春氏）、『山丞記』（五味文彦氏）、外記の官人達複数による編さん（森万数子氏）などの諸説が提起されており、『平家物語』の直接の影響については、なお万人の同意がえられる状況にはない（近藤成一「百練抄」『国史大系書目解題　下巻』吉川弘文館、二〇〇一年）。筆者は行綱の密告がフィクションであるという早川（川合）説は傾聴に値し、可能性は高いとは思うが、なお『百練抄』の史料価値を無下に否定しがたいので、行綱の密告を「どこまで真実を伝えているか、議論の余地がある」と保留し、密告の日付が関係者逮捕の直前である不審については、今成元昭氏の解釈を「魅力的」としたのである。「魅力的」とはむろん完全な同意を意味するものではない。（二一五頁）

（原論文にある早川厚一氏の著書を引用する注番号は川合が省略した）

拙稿では、『平家物語』と『百練抄』の関係について、早川厚一氏の説を引いて論述したが、早川説のみに依拠していたわけではないため、本章では、紙幅を割いて『百練抄』の性格を検討し、高橋氏の右の批判に答えたいと思う。

まず、『百練抄』と『平家物語』に一致する記事が多いことについては、例えば五味文彦氏が一九八七年に発表された「記録と史書のはざま」（『平家物語、史と説話』）において、「実は『平家物語』と最も相関関係の高い現存の記録は、『百練抄』である」（一二二頁）と指摘したように[19]、学界の共通認識になっていると思われる。五味氏は、「一時期、『平家』は『百練抄』を年代記として使用したのではないかという指摘もなされたことがあった程であるが、『百練抄』そのものの研究が進んで、鎌倉末期になって貴族の日記を抄出したものであることが明らかにされてから

はそうした考えは否定されてしまった。だが両者の相関関係の高さまでが否定されたわけではなく、まずは解明の手懸りとするため、『平家』と『百練抄』の相関関係について確かめておきたい」（一二二頁）として、『平家物語』と『百練抄』の同一内容の記事を検討したうえで、「こうした覚一本・延慶本と『百練抄』との照合作業を広く行なうと、驚くほどに一致箇所の多いことが判る。したがって『百練抄』の成立年代からみて、『平家』も『百練抄』も同一の日記に基づいて構成されたものであるという一応の結論がひき出せるであろう」（一二四頁）と指摘している。

以上の観点から、五味氏は『百練抄』の典拠を追究することによって、『平家物語』のもとになった日記を考察しようとした。そして、すでに同じ観点から『百練抄』を詳細に検討していた平田俊春氏が、承安三年（一一七三）から文治四年（一一八八）までの『百練抄』の記事は、すべて藤原経房の日記『吉記』の抄出であるとした結論に対して[20]、双方の治承四年（一一八〇）四月二十二日条や寿永二年（一一八三）六月十一日条などを比較して、むしろ『吉記』の記事の方が簡略で、『百練抄』の方が詳細で具体的であると論じ、『百練抄』『平家物語』がもとにした日記は『吉記』ではないと批判した。そのうえで五味氏は、朝廷政治の重要事項に関与する院司で弁・蔵人を兼ねた人物を検討し、治承三年以前の『百練抄』記事の典拠となったのは藤原定長の日記『山丞記』であり（但しこの時期の『平家物語』の典拠は藤原光能の日記）、それ以降は『百練抄』『平家物語』ともに藤原行隆の日記であるとした[21]。

そのほか森万数子氏は外記局の官人たちによる編纂と主張するなど、現在まで様々な見解が提起されているが[22]、編者については、『百練抄』後半部分が勧修寺流の日記をほぼそのまま材料として使用していることから、最後の記事である正元元年（一二五九）時点で活動している勧修寺流藤原氏（経房流）の誰かであり、部類記などの故実書も利用していると考えられることから、特定の個人の日記だけに依拠しているわけではないと推測する松薗斉氏の見解が、到達点を示しているといえよう[23]。

以上の『百練抄』に関する研究史を踏まえたうえで、ここで検討したいのは、『百練抄』と『平家物語』の共通の原拠史料を探すだけでなく、『百練抄』の編纂材料の一つに『平家物語』（原『平家物語』を含む）が用いられた可能性を探ることである。というのも、『百練抄』の記事のなかには明らかに虚構と見られる記事があり、それが延慶本『平家物語』の記事と一致する場合があるからである。例えば、『百練抄』寿永二年（一一八三）四月十七日条には、「四月十七日、三位中将維盛卿已下為二追討使一、下二向北陸道一、其勢十万騎」とあり、平氏軍による北陸道遠征の進発を伝えているが、ここに見える「其勢十万騎」という記載は、『百練抄』の現存諸本や塙保己一が校合した享和三年（一八〇三）刊本でも同じである。この軍勢数が、同時代の貴族の日記に書かれていたとは到底考えられないが、延慶本『平家物語』は、四月十七日に北陸道遠征軍が進発したことを詳しく描き、「其勢十万余騎」（第三末「為木曾追討軍兵向北国事」）と記しているのである。とすれば、この『百練抄』の記事は、『平家物語』に特徴的な誇張された軍勢数をそのまま用いているのではないだろうか。なお、実際には平氏の遠征軍は日程をずらして各部隊が順次北陸道に向けて進発しており、『玉葉』同年四月二十三日条は、「征討将軍等、或以前、或以後、次第発向、今日皆了云々」と伝えている。四月十七日に追討軍があたかも一斉に北陸道に下向したかのように記すのは、やはり軍記物に特徴的な表現であり、これも『百練抄』は『平家物語』と一致しているのである。

また、治承三年（一一七九）十一月の清盛のクーデタについて、『百練抄』治承三年十一月十五日条は、「或記云、上皇与二関白一、可レ令レ滅二平家党類一之由、有二密謀一之由有二其聞一」と記している。治承三年に清盛がクーデタを起こしたのは、①後白河院が故平重盛の知行国であった越前国を収公したこと、②院が故平盛子の遺産を管理する白川殿倉預に院近習の藤原兼盛を補任したこと、③三位中将藤原師家が二位中将藤原基通をこえて権中納言に補任されたこと、の三点に憤慨したからであった[24]。清盛は①と②を「法皇過怠」、③を「博陸之罪科」と指摘し、後白河院と関

白藤原基房が国政を乱していると批判した。[25] このように治承三年のクーデタの理由はきわめて明確であるが、その理由の一つに「鹿ケ谷事件」を想起させるような「平家党類」を滅ぼす「密謀」を掲げるのは、この『百練抄』の記事と『平家物語』だけであり、管見の限りほかには見当たらないのである。延慶本『平家物語』には、「近習ノ人々、皆以テ此一門ヲ滅スベキ由ヲ計候ケリ。是私ノ計ニアラズ。御許容有リケルニ依テナリ」（第二本「院ヨリ入道ノ許へ静憲法印被遣事」）とあり、『百練抄』のここでの「或記云」は、『平家物語』もしくは原『平家物語』を指していると考えられよう。「或記云」は必ずしも日記を典拠とする場合に限らないのである。

最後に、もう一つ気になる記述として指摘したいのは、文治元年（一一八五）十月、京で頼朝に叛旗を翻した源義経を襲撃した武士を、『百練抄』同年十月十七日条は、「今夜子刻許、義経宅（六条堀川）軍兵等自二四方一攻寄之、有二夜討之企一、義経忽合戦、襲来之勇士皆悉逃散了、此間院中騒動、四面門等被レ閉了、義経進レ使云、奇怪之輩皆追散了、不レ可二驚思食一者、件張本者、字土佐房云々」と記し、土佐房と明記している点である。京において義経・行家の反乱が露顕し、十月十七日に義経の館が襲撃されたのは史実であるが、『玉葉』には、「頼朝郎従之中、小玉党（見）（武蔵国住人）丗騎許事也、以二中人之告一寄二攻義経家一（院御所近辺也）、殆欲レ乗レ勝之間、行家聞二此事一馳向、追二散件小玉党一了云々」とあり、義経を襲撃したのは在京中の児玉党であったことを伝えているのである。鎌倉幕府権力における児玉党の役割については別に検討することが必要であるが、私見では頼朝直属の部隊として活動していたと考えており、[26] 京で義経の反乱が発覚すると、ただちに彼らが軍事行動を起こしている点は興味深い。

一方、土佐房昌俊については、菱沼一憲氏が、延慶本『平家物語』において弁慶や静が登場する「土佐房夜討譚」が後補されたことを指摘しており、[27] 注意が必要な人物である。『吾妻鏡』も、鎌倉の頼朝が義経を襲撃するために京に送り込んだ刺客として土佐房昌俊の動向を記すが、[28] 菱沼氏は、頼朝が父義朝の菩提を弔う勝長寿院の落成供養を目

前にして、刺客土佐房を京に派遣したとは考えられないとしており、本稿もその意見に賛成である。

なお、菱沼氏は土佐房昌俊による襲撃自体は疑われていないが、私見では、土佐房が義経襲撃関連記事以外に『吾妻鏡』に見えず、また一次史料にも一切見えないことから、疑わしいと感じている。慈円の『愚管抄』にも「頼朝郎従ノ中ニ土佐房ト云フ法師アリケリ。左右ナク九郎義経ガモトヘ夜打ニイリニケリ。九郎ヲキアイテヒシ〳〵トタ、カイテ、ソノ害ヲノガレニケレド」（巻第五「後鳥羽」）と記され、土佐房が義経を襲撃したことを伝えている。しかし、これも史実を伝えているというよりは、慈円が『愚管抄』を執筆する段階で、すでに土佐房説話が成立しつつあったことを示していよう。そしてそれが「鹿ケ谷事件」譚と同様に『平家物語』に大きな影響を与え、やがて『百練抄』の編纂材料として活用されたのではないだろうか。

『百練抄』が『平家物語』を編纂材料の一つとしている可能性が高い以上、〔史料4〕の『百練抄』の記事の前半に多田行綱による謀議の密告、それを理由とした藤原成親・西光らの捕縛が書かれているからといって、これを史実ととらえることはできないであろう。『平家物語』の「鹿ケ谷事件」譚は、謀議の主導者を藤原成親と描いており、『百練抄』が西光ではなく最初に成親を記しているのはその影響を示唆しているし、また、多田行綱は安元三年の政変以後も後白河院に近侍しながら京で活動しており、貴族社会には行綱による密告の噂も存在しなかったに違いない。(29)「鹿ケ谷事件」否定論に対して、『百練抄』に依拠する批判は成立しないと思われる。

以上、推測を交えながらではあるが、『百練抄』の編纂材料の一つに『平家物語』が存在した可能性について指摘してきた。少なくとも、『百練抄』が当時の貴族の日記だけを抄出したものであるとする発想は、転換する必要があると思われる。最近、松薗斉氏は、「『百錬抄』はいわゆる「私撰国史」の形式を持っているが、内容的には、「国史」とは異なる新しい歴史認識、言い換えると中世の人々が知りたい「歴史」（国家行事の年代記ではなく事件的・物語

的な歴史）を著そうとして編纂された書」で、「未完もしくは不完全な形態」で終わったことを指摘し、「歴史」書と軍記「物語」という近代以降の認識で史料的価値を判断することに警鐘を鳴らしている。[30] それは『百練抄』が用いた編纂材料にも該当する問題であるといえよう。

第四章　政変における平清盛と延暦寺大衆の連携

近年、松下健二氏は、『源平闘諍録』所収の二通の延暦寺衆徒の平清盛宛書状を紹介し検討している。[31] これまで注目されてこなかった文書史料であり、安元三年（一一七七）の政変の理解に新たな知見をもたらすものである。一通目は安元三年五月十七日に福原の清盛に宛てられたものであり、二通目は同年五月二十九日に京の西八条邸にいた清盛に宛てられたものである。[32] 二通とも『源平闘諍録』のみに収録されたものであるが、『源平盛衰記』が五月十七日書状の一部を引用している。[33]『源平闘諍録』編者がこの史料をどのように入手したかの解明は、今後の課題であるが、内容・時期ともに問題はなく、実在した文書であると判断される。[34]

さて、一通目の五月十七日の延暦寺衆徒の書状は、五月四日に後白河院の命によって天台座主明雲の身柄が拘束され、翌五日には天台座主職を解任、同十一日に覚快法親王が後任の天台座主職に補任されるとともに、明雲知行の所領が没官され、さらに十四日には明法家によって明雲の配流が勘申されるという緊急事態のなかで、清盛に送られたものである。冒頭には「欲下早被レ執中申前座主無二指故一被二配流一幷被上レ停二止門跡相伝私領無一レ謂子細状」とあり、[35] 前座主明雲の配流と門跡相伝の知行地の没官を停止するように、清盛に院への執り成しを依頼している。延暦寺衆徒は、「配流罪科抑何事乎、如二風聞一者、或讒言、度々山門訴詔皆是明雲結構也」と述べ、本来配流されるような罪科

がないにもかかわらず、度々の山門の強訴に関連して明雲に罪を着せようとする何者かの讒言があったとして、具体的な内容は「所謂追二却快修僧正一、訴二詔申成親卿幷師高一事是也」とする。すなわち、①仁安二年（一一六七）二月、後白河院が帰依していた天台座主快修が大衆の蜂起によって山門から追却された事件、②嘉応元年（一一六九）十二月、藤原成親の配流を求めて延暦寺大衆が大内裏に強訴した事件、③安元三年四月、加賀守藤原師高の配流を求めて延暦寺大衆が閑院内裏に強訴した事件、の三件が明雲の扇動によるものと讒言されたが[36]、いずれも座主明雲には罪はないと主張している。そのうえで、明雲は後白河院に菩薩戒を授けた「一朝之国師、法皇之和尚」であり、「〔平清盛〕大相国菩薩戒和尚」でもある。「抑禅定大相国已為二一朝之固一、又是万人之眼也、天下之乱、山上之愁、何無二其成敗一矣」と、清盛を「一朝の固め」「万人の眼」と高く評価したうえで、協力を仰いでいるのである。

しかし、この書状では福原の清盛は動かなかった。その後、第一章でも述べたように、五月二十三日には明雲の伊豆配流が強行され、近江国で待ち構えた延暦寺大衆によって、明雲が比叡山上に連れ去られるという大事件に発展した。激怒した後白河院は、延暦寺への武力攻撃を平氏一門に命じるために使者を福原に派遣し、二十七日夜に入洛した清盛は、翌二十八日に院御所で後白河院と対面し、延暦寺への武力攻撃をしぶしぶ了承させられる。二通目の延暦寺衆徒の書状は、まさにその翌日の二十九日に西八条の清盛のもとに届けられたのである。

二通目の五月二十九日の延暦寺衆徒の書状は、「延暦寺衆徒等重言」で始まり、「請三重被二奏達一衆徒等暫惜二留前座主明雲一更非二謀叛之儀一、偏為二鎮護国家興隆仏法一申二止配流事一継二菩薩戒血脈一、将レ叶二山王大師素懐一、愁歎悲哀子細状」と述べており[37]、延暦寺大衆が配流途中の明雲を奪還したことは決して「謀叛之儀」ではなく、鎮護国家・仏法興隆のために、明雲配流を停止し「菩薩戒」の血脈を継承することによって、「山王大師」の素懐に達したいと訴える書状である。「重言」「請重被奏達」とあることから、二通目の書状も、清盛に後白河院への執り成しを依頼

するものであったことは明らかである。二通目の書状で特に強調されていることは、「若処二配流之科一、忽得二還俗之名一、明雲補二座主一以後十一年之間、得度受戒之輩失二戸羅稟承一、入壇灌頂之倫亡二悉地之血脈一」とあるように、もし明雲が配流となり還俗させられることになると、天台座主であった十一年間に明雲が授けた戒の継承が失効し、灌頂を受けた者は「悉地」の血脈が断絶してしまうことであった。松下健二氏が指摘したように、衆徒は自らの連なっている法脈を失い、仏法の担い手としての資格が剝奪されるという強い危機意識をもっていたのである。

そして次に強調されていることは、「而准二違勅之儀一、仰二官兵之輩一、山上坂本堂塔神社悉可レ被二焼失一之由、有二風聞一、愁歎之至何事如レ之」と、後白河院や院近臣たちが計画している延暦寺への武力攻撃への危機感である。しかしそれでも、「非レ拠雖レ不レ免二回禄之誡一、至二入壇惣持院一者、尚奉二為朝家一欲レ駐二残之一」として、たとえ堂舎が灰燼に帰したとしても、円仁が創建した東塔の総持院だけは朝廷のために死守すると主張し、官兵との武力衝突を必ずしも回避しようとしていない点が注目されよう(38)。そして、あらためて明雲の三件の罪科を一つ一つ具体的に否定して、清盛による執り成しを重ねて懇願しているのである。

清盛が後白河院の前で延暦寺への武力攻撃をしぶしぶ合意させられた翌日の二十九日、このような書状が清盛の手元に届けられ、この日の夜半に突如として西光の捕縛に踏み切ることになる。清盛が政変を起こすにいたった直接の要因は、この延暦寺衆徒の書状であろう。そして政変直後に九条兼実が〔史料3〕の『玉葉』に記した清盛による西光捕縛の理由も、まさにこの延暦寺衆徒の書状の内容に対応するのである。

一方、二十九日に清盛に書状を送った延暦寺大衆は、翌六月一日の夕方には、武力衝突に備えて西坂本の一乗寺下り松まで下山していた。『玉葉』同年六月三日条には、「大衆一昨夕下二垂松辺一、以二使者一示二送入道許一云、令レ伐レ敵給之条、喜悦不レ少、若有下可二罷入一之事上者、承レ仰可レ支二一方一云々」と見えており、延暦寺大衆が清盛のもと

に使者を送り、敵の西光を討ったことを感謝するとともに、今後もし必要であれば清盛の指示にしたがって連携して軍事行動をとることを申し入れている。安元三年の政変は、こうして平清盛と延暦寺大衆の軍事的連携のもとで実行されたのであり、清盛がその日「庭ニタヽミシキテ、大衆大ダケヘカヘリノボラセ給フ火ノミエ候シマデハ、ヲガミ申候キ」（巻第五「後鳥羽」）と、帰山する大衆の松明の火が見えなくなるまで、庭に畳を敷いて拝んでいたと伝えられるのも、清盛と延暦寺大衆との強い連帯感を示していると思われる。清盛にとっても政変を起こすことは相当の決意が必要だったのであり、それを支えたのが延暦寺大衆との連携だったのである。

一方、この事態を全く逆の視点から見ていたのが、当時、比叡山無動寺で千日籠山修行を行っていた慈円である。慈円は、「明雲ハ山ニテ座主アラソイテ快修トタヽカイシテ、雪ノ上ニ五仏院ヨリ西塔マデ四十八人コロサセタリシ人ナリ。スベテ積悪ヲヽカル人ナリ」（巻第五「後鳥羽」）と明雲を激しく批判している。安元三年の政変に際して延暦寺大衆が西坂本まで下山したことも、「コノ日ハ山ノ座主明雲ガ方大衆西坂本マデクダリテ、カクマカリ下リテ侍ルヨシ云タリケリ。世ノ人ノアキレマドヒタルコトニテ侍キ」（巻第五「高倉」）と記し、人々を驚き困らせた事件として位置づけている。このような明雲と明雲方大衆に対する慈円の批判的な眼差しが、のちに安元三年の政変における延暦寺と清盛の協力関係を隠蔽し、「鹿ケ谷事件」として『愚管抄』に描かせることになったのかもしれない。

なお、『愚管抄』『平家物語』によって「鹿ケ谷事件」譚が普及した南北朝期においても、延暦寺内部では、西光父子が日吉山王権現の「神罰」によって滅んだという言説が語られている[39]。山内首藤氏の家伝に見られるような、軍記物語の浸透とそれに同化されない史実に基づく家伝との関係が[40]、延暦寺内に伝えられた西光伝説にも見られるように思われる。今後も是非考えてみたい問題である。

おわりに

以上、本稿は「鹿ケ谷事件」否定論の立場から、安元三年の政変の性格について論じてきた。「鹿ケ谷事件」を史実ではなく、虚構として理解すると、歴史学では何が見えてくるのであろうか。

第一に、『平家物語』の成り立ちについて、一つの予測が立つことである。『平家物語』は全十二巻で構成されているが、平清盛一門の繁栄を描く巻第三（延慶本では第二本）までの前半部と、治承・寿永の内乱の展開と平氏一門の滅亡を描く巻第四（延慶本では第二中）からの後半部に分かれている。前半部のなかで「鹿ケ谷事件」関連説話の章段数は半分近くに及んでおり、いかに中核的な位置を占めているかが知られよう。そして、後半部の巻四の最初には、源頼政が以仁王に挙兵を勧める「源氏揃」（延慶本では「頼政入道宮ニ謀叛申勧事 付令旨事」）の章段があり、そこで延慶本をはじめとする読み本と、語り本の一部は、以仁王令旨に呼応して挙兵する源氏武士として「摂津国ニハ多田蔵人行綱」をあげているのである。これは『平家物語』の形成段階においては、多田行綱の謀議密告が必ずしも自明のことではなかったことを示しており、行綱の密告が史実ではなかったとする私見と符合する。一方、覚一本は「摂津国には多田蔵人行綱こそ候へ共、新大納言成親卿の謀叛の時、同心しながらかゑり忠したる不当人で候へば、申に及ばず」とわざわざ記しており[41]、『平家物語』内部での矛盾解消をはかっているのである。このことは『平家物語』の前半部と後半部が別個に形成され、統合された可能性を示すものであろう。

第二に、「鹿ケ谷事件」譚を共有する文献群、すなわち『愚管抄』『平家物語』『百練抄』などの相互関係が、新たな検討課題になってくることである。これは「鹿ケ谷事件」に限らず、先に触れた土佐房説話でも同様であり、そこ

ではさらに『吾妻鏡』が加わることになる。中世人の新たな歴史認識に基づく事件的・物語的な「歴史」が広く編纂された結果、[42] 史実と虚構の境界を見極める学問的努力が現代の歴史研究者に求められているのである。

［注］

（1）拙稿「「鹿ケ谷事件」考」（『立命館文学』六二四号、二〇一二年）。以下、本文中で述べる拙稿とは本論文を指す。

（2）拙稿「治承・寿永の内乱と伊勢・伊賀平氏」（『鎌倉幕府成立史の研究』校倉書房、二〇〇四年）三七七・四〇三頁、同「生田森・一の谷合戦と地域社会」（『地域社会からみた「源平合戦」』岩田書院、二〇〇七年）六五頁、同「平家物語とその時代」（『平家物語を読む』吉川弘文館、二〇〇九年）一三～一八頁、同『源平の内乱と公武政権』（吉川弘文館、二〇〇九年）五八～六八頁、同「鎌倉幕府・戦争・『平家物語』」（『院政期武士社会と鎌倉幕府』吉川弘文館、二〇一九年、初出二〇一一年）一六～二〇頁。なお、髙橋昌明氏は「嘉応・安元の延暦寺強訴について」補記（『平家と六波羅幕府』東京大学出版会、二〇一三年）において、「近年川合康氏は日本文学研究者早川厚一氏の「鹿ケ谷事件」否定論に触発されて」私見を展開したかのように述べているが（二一四頁）、これは事実ではなく、二〇〇四年に拙稿を発表した段階では早川厚一氏の研究に気づいておらず、のちに期せずして早川氏と同じ結論にいたっていることを知った。そこで二〇一二年に発表した前掲注（1）拙稿では、早川説を明確に研究史に位置づけるとともに、髙橋氏の早川説の誤読についてあわせて指摘を行った。早川説については、早川厚一『平家物語を読む』（和泉書院、二〇〇〇年）一四～二二頁・五〇～六一頁を参照。

（3）松下健二「鹿ケ谷事件における西光と成親」（学習院大学人文科学研究所『人文』一三号、二〇一五年）一四九頁。

（4）呉座勇一「南北朝内乱と『太平記』史観」（『軍記物語講座　第三巻　平和の世は来るか　太平記』花鳥社、二〇一九年）。

（5）『顕広王記』は、髙橋昌明・樋口健太郎「資料紹介　国立歴史民俗博物館所蔵『顕広王記』承安四年・安元二年・安元三年・治承二年巻」（『国立歴史民俗博物館研究報告』一五三集、二〇〇九年）を使用した。

（6）『玉葉』安元三年六月四日条。

（7）『愚昧記』安元三年六月四日条、前掲注（6）史料。
（8）『玉葉』安元三年六月十一日条、前掲注（6）史料。
（9）前掲注（6）史料。
（10）冨倉徳次郎『平家物語全注釈　上巻』（角川書店、一九六六年）二九〇頁。
（11）牧野和夫「成簣堂文庫蔵『年号次第』一冊とその周辺」（『延慶本『平家物語』の説話と学問』思文閣出版、二〇〇五年、初出一九九九年）、佐々木紀一「語られなかった歴史」（『文学』隔月刊三巻四号、二〇〇二年）。
（12）呉座勇一『陰謀の日本中世史』（KADOKAWA、二〇一八年）。
（13）呉座勇一前掲注（4）論文二二八頁。
（14）髙橋昌明「嘉応・安元の延暦寺強訴について」（『平家と六波羅幕府』東京大学出版会、二〇一三年、初出二〇〇四年）補記。
（15）下向井龍彦『日本の歴史07　武士の成長と院政』（講談社、二〇〇一年）二九五頁、上杉和彦『平清盛』（山川出版社、二〇一一年）六二頁。
（16）延慶本『平家物語』は、北原保雄・北川栄一編『延慶本平家物語　本文篇上下』（勉誠社、一九九〇年）を使用した。
（17）延慶本注釈の会編『延慶本平家物語全注釈　第一末（第二）』（汲古書院、二〇〇六年）二九八頁。
（18）冨倉徳次郎前掲注（10）著書三九六頁。
（19）五味文彦「記録と史書のはざま」（『平家物語、史と説話』平凡社、一九八七年）。
（20）平田俊春「百練抄と吉記」（『私撰国史の批判的研究』国書刊行会、一九八二年、初出一九七三年）。
（21）五味文彦前掲注（19）論文、同論文補論「『百練抄』と『古今著聞集』」も参照。
（22）森万数子「「百練抄」の性格と編者について」（『法政史学』四六号、一九九四年）、近藤成一「百練抄」（『国史大系書目解題下巻』吉川弘文館、二〇〇一年）。
（23）松薗斉「『百錬抄』に見える中世人の歴史認識」（『日本歴史』八六一号、二〇二〇年）。
（24）『玉葉』治承三年十一月十五日条、『山槐記』治承三年十一月十四日条。
（25）『玉葉』治承三年十一月十五日条。

（26）武蔵・上野両国に勢力を展開した児玉党は、拙稿「鎌倉幕府研究の現状と課題」（『院政期武士社会と鎌倉幕府』吉川弘文館、二〇一九年、初出二〇〇六年）において、頼朝直属軍として指摘した武蔵・上野の党的武士団の典型であったと思われる。

（27）菱沼一憲「源義経の挙兵と土佐房襲撃事件」（『日本歴史』六八四号、二〇〇五年）。

（28）『吾妻鏡』文治元年十月九・十七・二十二・二十六日条。

（29）前掲注（1）拙稿二四四頁。

（30）松薗斉前掲注（23）論文三三・三四頁。

（31）松下健二「明雲流罪事件の再検討」（学習院大学人文科学研究所『人文』一四号、二〇一六年）。

（32）松下健二氏前掲注（31）論文では、二通目の書状も「福原入道大相国」のもとに遣わすとあることから、福原に送られたと解釈し、史実と異なることを指摘するが、「福原入道大相国」は清盛の通称として解釈すべきであろう。

（33）『源平盛衰記』巻第五「山門奏状の事」。松下健二氏前掲注（31）論文。

（34）福田豊彦・服部幸造『源平闘諍録（上）』（講談社、一九九九年）三〇七・三〇八・三〇九・三四三頁。

（35）『源平闘諍録』一之下「山門大衆奏聞状幷送副入道相国方之状」。『源平闘諍録』は、早川厚一・弓削繁・山下宏明編著『内閣文庫蔵 源平闘諍録』（和泉書院、一九八〇年）を使用するとともに、前掲注（34）注釈書も参照した。

（36）この明雲の罪科は、朝廷が明法博士らに諮問した「明雲条々所犯」と一致する（『玉葉』安元三年五月十一日条）。

（37）『源平闘諍録』一之下「山大衆依奉留明雲法皇有逆鱗、依之大衆重遣状相国方」。

（38）松下健二氏前掲注（31）論文。

（39）応安元年八月四日「日吉十禅師彼岸所三塔集会事書」（「南禅寺退治訴訟」、『大日本史料』応安元年八月二十九日条）。

（40）拙稿「山内首藤氏の「討死」と『平治物語』『平治物語絵巻』『平治合戦図屏風』」（『アジア遊学二六二　資料論がひらく軍記・合戦図の世界』（勉誠出版、二〇二一年）。

（41）覚一本『平家物語』は、高木市之助・小澤正夫・渥美かをる・金田一春彦校注『日本古典文学大系　平家物語　上下』（岩波書店、一九五九年）を使用した。

（42）松薗斉前掲注（23）論文。

（文学研究科教授）

SUMMARY

A Reconsideration of the Shishigatani Incident

Yasushi Kawai

This paper reexamines the turmoil surrounding the arrest and execution of Saikō and Fujiwara no Narichika by Taira no Kiyomori in Angen 3 (1177), and demonstrates that it was a military intervention in which Kiyomori blocked the armed attack on Enryaku-ji temple by the forces of cloistered Emperor Go-Shirakawa and his close retainers. This paper argues that the accepted theory that the turmoil came about because there was a meeting to conspire against Kiyomori held at a mountain villa in Shishigatani, and that Kiyomori was informed of this conspiracy by Tada Yukitsuna, is not based on a historical occurrence.

The idea that the conspiracy against Kiyomori was undertaken in secret was something that circulated in aristocratic circles at the time, but was in fact only a rumor. According to an aristocratic diary, immediately after Saikō's capture, the Tendai Zasu Myōun, high abbot of Enryaku-ji, blamed Saikō for a crime he was not guilty of, and this was the reason that Go-Shirakawa urged a military attack on Enryaku-ji. Also, Taira no Kiyomori was able to cause the disturbance because of the justifiability of his blocking of the attack on Enryaku-ji. This paper demonstrates that even aristocratic society accepted this.

The historical work *Hyakuren shō* is one source for the *Heike monogatari*. Just because the *Hyakuren shō* mentions the Shishigatani Incident does not mean it should be taken as an historical incident. A letter recently introduced in academic circles from Enryaku-ji addressed to Taira no Kiyomori pleads that the innocent Tendai Zasu Myōun should be pardoned, and that the military attack should be halted. This paper argues that Kiyomori caused the political disturbance based on this letter.